

Ⅲ - 3 言語的情報処理障害を呈した脳挫傷の一例

——意味記憶障害の構造と訓練の試み——

○伊藤 千恵¹⁾
原 寛美³⁾

小林 みき²⁾
堀内 哲吉⁴⁾

意味記憶障害を呈した症例を経験し、その特徴および訓練について検討したので、報告する。

【症例】22歳男性。脳挫傷。MRIより左側頭後頭葉に所見あり。右動眼神経麻痺(+)、右同名側半盲(+)、四肢体幹の麻痺(-)、失行・失認(-)、異常行動(-)、言語機能における著明な障害(-)、ADL自立。

【評価および結果】ウェクスラー成人知能検査、Revermead Behavioral Memory Test、標準失語症検査などにより、エピソード記憶は保たれていたが、漢字を含めた一般知識や視覚的記憶力を要する課題において著しい障害が認められたため、意味記憶障害を疑った。判別のため、報告されている①上位概念は保持されても属性は障害される、②各カテゴリー間において成績に差がでる、③与えられた感覚モダリティー間において成績に差がでる、といった意味記憶障害におけるこれらの傾向の有無について調べるため、以下の評価を実施した。

①②「絵カードのカテゴリー分類」、「3つのカテゴリーにおける目標語に対する属性の想起(慶大・吉野の意味記憶検査より一部抜粋)」などより、カテゴリー分類はすべて可能だが属性は障害されていた。また、その障害は無生物カテゴリーよりも視覚的情報に大きく依存する生物カテゴリーにおいて著明だった。

③「視覚(漢字の形態認知)、聴覚(環境音、メ

ロディー)、触覚(日常物品)、嗅覚・味覚(食物、嗜好品)といった単独刺激による対象物の認知検査」より、聴覚における環境音および物品の触覚認知は可能だったが、他の、感覚においては対象物との同定は困難だった。

【結果】前述した3つの傾向を持ち得たことより、意味記憶障害であると考えられた。

【経過】現在、日常生活に影響を及ぼすであろう一般知識の障害に対して、提示された単語の意味説明、および漢字の読み書きなどを行っているが、大きな訓練効果が認められない。今後の訓練法の検討が必要であると思われる。

<RBMT>

項目	標準プロフィール			
	H7.9	H7.10	H7.11	H8.3
1. 姓	0	1	2	2
2. 名	0	1	2	2
3. 持ち物	2	2	2	2
4. 約束	2	1	2	2
5. 絵カード	2	2	2	2
6. 新聞記事				
a. 直後	0	1	1	2
b. 遅延	0	0	2	2
7. 顔	0	2	2	0
8. 道順				
a. 直後	2	2	2	2
b. 遅延	2	2	2	2
9. 用件(直後と遅延)	2	2	2	2
10. 見当識(日付を除く)	0	0	0	0
11. 日付	2	2	2	2
合計	14	17	21	20

1) 相澤病院リハセンターST

2) 同上 OT

3) 同上 リハビリテーション科

4) 同上 脳神経外科

